ノーマル＆魔法の媚薬☆　　星野フレム

相手は素人さん

　きっとこの世は、勘違いしてるのだろう。アタシ達AV女優は、別に慰めだけに存在するんじゃないんだ。人が子供を作りたいほど異性を好きになった時の手本だって、解らないかな？　そりゃ、今は色々蔓延してるよ。馬鹿みたいな監督が、女の子騙してさ。金に釣られたその子は、見事にネットに上げられちゃう。その子は、その事知ってるのかな？
　男に操を渡すって事は、そんなに甘いものじゃないよ。軽いものじゃないよ。男だって、それをちゃんと解らないといけないし。女だって、それを弁えて受け入れなきゃダメでしょ？　セ〇クスって簡単なモノじゃないんだよ？　例えば男優さん。ホントに仕事でしてる人は、薬だって飲むの。バイアグラで勃起させたり、ペニスが大きくなる薬を飲んだり。色々快楽主義でも苦労してるのよ？　でも、男が観るのはそこじゃなくてさ。結局アタシ達なんだよね。ネットって怖いよ。色々な子達が居るでしょ？　学生の子供が、大人の女の人に簡単にこう言うの。おっぱい見せてって。君じゃなくちゃ駄目だとか、殺し文句言うんだけどね。
「大人になってからね。お姉さん、犯罪は犯したくないし、子供に興味は無いんだ」
　大抵は、そうあしらう。愛ある事って、ホントは奥深いのにね。AV女優がホントの女優にのし上がったあの時代を、皆知らないのよね。手段が、方法になって。その結果、快楽だけしか求めない世の中。それが、今なんだよ。代わりに、BLって奴も増えたよね。リアルBLもGLもさ。バイセクシャルだって居るよね。随分前からさ。でも、最近やり過ぎじゃないかな？　表現の自由だけどさ。

「かなえさーん出番です」
「あ、はーい」
　さてと、今日も仕事前の日記終了。スタジオで今日は、お仕事。勿論アダルトなほうね。
「今日は、この人として貰えますか？」
　外見が、もろに何処かで捕まえてきた大学生の男の子。まーアタシまだ二十代前半だからいいけど。この子目が泳いでる……。どうにかしてあげないと。
「君、歳幾つ？」
「え、あの十九です」
　まだ、大学一年で捕まえてくるとか……。また社長に文句言わないと。
「安心してね、君の顔は映らないから。アタシは、顔見せのほうだから見せるけど、君はモザイク掛かるから。ね？　安心して」
「かなえさん、スタッフの仕事取らないで下さいよ」
「サトくん？　そんな事言える立場？　どうせまた社長に言われたんでしょ？　お姉ちゃん系の撮影して来いって。バレバレだからね？　こんな初心者君」
「う、すみません」

「謝るくらいなら、連れてくるな！　馬鹿サト」
「返す言葉もないです……あ、でも……謝礼前金で払っちゃたんで、そのまま帰すのも、ね？」
「はいはい！　やりますよーだ」
「おい、何やってるサト！　さっさと、準備して説明しろ！」
「あ、すみません！　監督！」
　その後は、私が受け役で、マゾなお姉さん。その連れてきた子は、調教師の役なんだって言われた。私は、ため息をついて、一言漏らす。
「はーい、じゃあ中出し？　外出し？」
「えーっと、調教なんで中もアリなんですけど、今回素人さんなんで、イっちゃったら中かと」
「じゃ、いつもの病院に行けばいいの？」
「はい、すみません」
「解った解った、元気出して、サト君！　仕事しよ」
「はい！」

「調教するの？　私、慣れてないから……優しく……」
「お前に拒否権限はない。ブラを外せ」
　この子乗ってる？　ローションを私の胸にかけて、言う。
「挟め」
「何を？」
「俺のペニスだ」
　そう言って、アタシの胸にペニスを挟み込み、激しく胸でこすり付ける。
「……いや……あ、ちょっと！　いやぁ！　ああ、こすれる！　胸が……嫌」
　ローションを塗ったせいか、ニチニチと音が漏れる。
「気持ちいいぞ」
「ご主人様……激し過ぎます」
　ホントに激しいよ！　この子……！
「次は、フェラだ。ほら咥えろ！」
「ん！　んー！　あふ……うん！」
　　ジュリュ……ジュルル。卑猥な音がする。
「いいぞ一気持ちいい……うっ！」
「もう、出たんですか？　早いし濃い……入れて下さい。私の……いけない場所に」
　台本通りだけど、ここは演技！　でもちょっと私マゾあるかなぁ？　気持ちいい。
「もう我慢できないのか？」
「はい」
　そして挿入される。おっきい！　壊れちゃう！　予想外！
　ジュクジュクといやらしい音がする。この子サドに目覚めたみたいで、突き上げが凄い。

「ああ、ああ！　あふ、あん！　激しい……いん！」
「気持ちいいだろ？」
「は、はい。御主人様！　ああ！　イク！」
　数分後。

「外に出してやった。また俺のオモチャになれ」
　そのまま精液をビュルビュルと顔に掛けられた。
　私は、愛しいように掛けたら精液を口に入れて、言った。
「濃くて美味しいです……ご主人様、もっと下さい」

　こうして、また一人快楽主義者の男優さんが増えました。収録後、付き合ってくださいって言われたけど、仕事だからごめんねーって言ったら、他にも私みたいな美人は居るのか？　て聞かれた。
「そうだねー、沢山いるよー。でも気を付けないと警察に捕まる仕事だから気を付けてね」
　こうして、私の仕事の一日が終わる。
　まだ、結婚する気無いけど。ま、男優と結婚は無いよね。幸い中出しは無かった。
　今日の撮影もちゃんと、売られる訳だけど……あの子結構大きかったなぁ。
　さて、プライベートを楽しもう！
「遊びにいくぞー！」
　　ナナイア×フレイン

　ある日、フレインは可愛いナナイアを意識していることに気付く。
「んぅ！　ん……あ……！」
　ジュボジュボ……くちゅ……ジュボ……。
　ずっと指をあそこにいれながらオナニーをしていた。
　自分に芽生えたその感情は、同性を好きになるゲイと同じだった。
　言わばこの瞬間から彼女はレズビアンなのであろうと思われるが違った。
「はぁ……はぁっ！」
　その大きな胸を裸で揉みながら彼女のそこには男性のあれが生えていた。素早くそれをしごく。
「んぅ！　んっ、んぅっ！」
　素早くしごく。
　シコシコシコ！
　やがて精液が出る。
　ドピュルルルル！ドピュ！
　彼女は腰が抜けてくたっと座る。
「ナナイア……犯したい……」
　再び勃起し、またオナニーをした。

　その日、会う約束をしていたナナイアはフレインの住む一軒家に訪れる。
「？」
　妙にイカ臭いがした。ローブを着たフレインは彼女が来たその日に彼女の唇を奪う。
「ん！？」
　クチュ、チュルチュパ……
　そのディープキスで意識が飛んでしまうナナイア。
「ひゅれいんひゃん……」
　そのままドサッとベッドに押し倒され、服を力任せに破られ、胸とあそこがあらわになった。
　意識がボーッとしている状態でフレインを見ていると、彼女は真っ白いローブを脱いで、ブラもパンツの脱ぎいきりたつそれをナナイアの目の前に出した。
「はぁ……はぁっ！　もう我慢できないの！」
　ベッドの上で驚くナナイアの前で小瓶の液体を口の中に含みキスを再びする。
「ん！　ゴクン！」
　何かを飲まされた。するとフレインがそのさまを見て言う。
「魔法の媚薬。もう戻れないよ、私のナナイア。エッチしか考えられなくなるわ」
　胸とあそこが熱い。気が付くとおっぱいが大きくなっていた。
　ナナイアの大きくなったおっぱいに自分のいきりたったものを挟んでパイズリする。
「んあっ！　あぁん！　ああっ！」
　思わず声をあげるナナイア。揉まれながらいきりたつそれを口に突っ込まれる。
「んぶっ！　んんっ！　んぅっ！！」
　ドピュ！
　一気に口の中で射精し、フレインの顔はとろけるような笑みを浮かべ、出しきるまでよだれが口から流れていた。
　チュポン！
　ナナイアの口から出されたそれはまだいきりたっている。
　ナナイアは意識がエッチにしか集中していないため、股を広げてあそこを広げる。
「きて……」
「ナナイア！！」
　そのままナナイアをまずは正上位で犯し始める。
　ジュボジュブジュボジュボジュボ！
　止まらない腰が卑猥な音をたてる。
「ああっ！　んぅ！　ん、あ、あ、あ」
　それをズボズボと動かす。
「ああっああっあんっあぁんっ！」
　されるがままにナナイアは犯されていた。フレインはナナイアのおっぱいを揉みながら時々パイ

オツをコリコリと噛んだり吸ったり、ディープキスで舌を絡み合わせてお互いよだれを垂らしながらナナイアは犯され尽くされた。
「あそこが、熱いよぉ……！」
ナナイアのあそこにはいきりたつ男性のそれがあった。
「たまんない……！　こんなに可愛い子にこんなのが生えてるなんて、んぶ、じゅぶんぶっ……」
ナナイアに生えたそれにしゃぶりつき、フェラをするフレイン。自分のおっぱいに挟んでそのままパイズリしながらいきりたつナナイアのそれをフェラする。
「ああっ！　あはーっ！　凄い！　気持ちいい！」
　そのままイく。
　ドピュルルルル！
　口の中で盛大に射精したナナイアは、どんどん感覚に慣れていく。まだいきりたつそれをフレインも手でシコシコしながらナナイアのそれをフェラし、ナナイアもフレインのあれをフェラした。互いに物凄くしゃぶる。
　ジュブジュブジュビジュブ……チュルルルジュポジュポ！
　卑猥な音を奏でながら二人はエッチのことだけ考える。
「んふぅ……んぶ！　ジュブ……んぅっ！」
「ひゃいこうよ、にゃにゃいあ、んぶ！」
　シックスナインと呼ばれる体位で行う二人はやがて二人同時にイく。
　ドピュルルルル！ドピュ！ドピュルルルル！ゴックン！
　二人とも互いの大量射精された精液を飲み込み。ナナイアは理性がなくなりフレインを押し倒し、あそこにまだ射精の止まらないち〇ぽを挿入する。そして腰をピストンする。
　ジュボジュブジュボジュボジュボ！
「あひぃっあんっあんっあんっ！　激しいよぅ！　もっとしてぇっ！」
　ナナイアの顔は初めて挿入したときからとろけていた。フレインの顔もさっきの喘ぎ声通りにとろけている。足をナナイアの腰に回しロックする。
　ジュボジュブジュボジュボジュボ！ドピュルルルル！
　いれながらいきまくるナナイアは頭がもう真っ白になり、そのまま次はフレインが犯す。
「ああっ！　あんっ！　ひゃあっ！　あ、あ、あ、ああっ！」
一時間程度の犯し合いをして二人はがぁはぁと息を荒くしてベッドに横たわる。

情事はもっと続く。お楽しみはこれから☆

セ〇クスの相手は……

「はぁっはあっ」

必死で指を秘所に出し入れしている……している？　そして俺は気が付いた。 そして唖然とする。多分自分と同じ時くらいにしてたのだろう。いや待て俺の体 はどうした？　周りを見るが見る限り一人暮らしの女性の部屋だ。オナニーを しながら立ち上がり、カーテンを少し開ける。

「ここ……」

不意に出た自分じゃない可愛い声にハッとする。まだ、気持ち良いので指は出 していない。ここは、俺の家の近所だ。そう思い、オナニーを途中でやめる。そ して、そのまま俺の家へと女性の体で靴を履いて歩き出す。

やる事は一つだ。この女の体で、自分とセ〇クスする事だ。家に近づくごとに 俺の体の意識が分かった。まだオナニーしているらしい。俺の、いや、女性の体 から舌なめずりが聴こえる。早く男の俺のちんちんをほうばって、フェラしたい。 実際やられた事はあるが、殆どイかなかった。だが今度は違う。俺を知り尽くし ていて女の俺が俺のちんこを咥えるのだから。

「……」

その時俺は、もう直ぐ家に来る女の俺とヤるために、ひたすらシコっていた。 もう、何回も想像でいったが、まだ抜ける。俺はこの事態を楽しんでいた。もう 直ぐ女の俺が来る。俺は俺とセ〇クスするという体験が出来ることを最高潮に 考え、そして女の俺が来た。俺はそっと家のドアを開けると、女の俺がディープ キスを求めてきたので、とにかく俺の部屋に入り、お互い脱いでシックスナイン から始めた。

チュルル……ジュルル！

いやらしい音がなる。俺たちは顔を真っ赤にして興奮気味にお互いの秘所と 男根を舐め回す。女の俺が言った。

「早く」

その見事な女の体は、どう見ても二十歳すぎだ。俺は濡れた女のまんこにぶち 込んだ。「はぁっ！？ あん！　あ、あ、あっ！」

これはおかしい。俺が感じる事は、女とやっても無いというのに、感じまくっている。いや、その感じている両方の意識が溶け合い、もう正気ではいられなか
った。俺は何度か女の中でイき、女の俺はその度に絶頂になる。そして俺は。女 の俺はフェラの欲求が出てきてしゃぶりまくり、俺はイッた。そして今度は結構 ある胸でちんこをシコって貰うと、今度はそうしながらフェラして貰った。どん どん溢れる精液。俺は記憶が飛ぶまでやり合い、そして日常に戻った。女の意識 は元に戻っているが、俺とのセ〇クスは知らないらしい。

エロスの神

　私はエロスの神。その名もエロス。
　だが、独身である。何故かは解らない。
　ただ、しょっちゅう人間が言っているリア充とやらの手助けをしている。
　主に性的な事だが、今回の者達は、どうやらちょっと変わっている。
「リンちゃん、そこくすぐったいよぉ」
「ここが、カナの性感帯かぁ」
「あ、ばかぁ……」
　どうやら出番が来たようだ。私は彼氏であろう男の男根に宿る。
「う！」
「どうしたの？　リン。あ……」
「ごめん、なんか滅茶苦茶ちんこが硬い……なんだこれ？」
「リン、いれたいの？」
「はぁ？　えーっとそうなるな」
「正直だなぁ。でも、私はそんなリンが好きなのだぁ」
　彼女らしき人物が全裸になった。より一層男根を硬くさせる。
「凄い……脈どころの騒ぎじゃない。真っ赤……」
「こんなの初めてだ……やべぇ……もう我慢が」
「ん？」
　その一言で口を空ける彼女。
「んふ、んぅ。んぅ、んぅ」
　ジュル、ピチャ、ジュボ、ジュルルル。
「カナ……すげー気持ちいい」
「んふふふ。リンの事はお見通しなんだから」
　激しく頭を前後に振る彼女。彼氏のほうは、イッったようだ。
　ビュルルルルルルウッ！
「ん、濃い……今日のリン凄いね」
「自分でも解らねぇけど、こんだけされてるのにギンギンだ」
「じゃあ、いれよっか」
「うん」
　激しく腰を動かす彼氏。私は彼の男根に宿りながら、
　彼女の体を貪り尽くす。もっとも男根部分だけだが。
「す！　凄いよ！　硬くて、熱くて！　太い！　いい！
　あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あんっ！」
「はぁ！　やべぇ……止まらねぇ」

「今日危険日じゃないから、中に出していいよ」
「マジか」
「うぅん！　はぁ、はぁ。大マジです」
　頃合いを見て、彼を射精させる。通常よりも凄い量が流れる。
「あ、凄い。中が暖かい……」
「はぁ、はぁ、はぁ」
「リン？」
「なんか、疲れた……いつも三倍出てねぇ？」
「妊娠しちゃうかも」
「はぁ！？　危険日じゃないんだろ？」
「だけど、こんなに一杯じゃぁ……なーんてね」
「カナぁ……あんま驚かせるなよ」
　だが、それは彼女の嘘である。
　彼女は、彼を我が物にするために、危険日じゃないと偽った。
　数日後。
「リン。出来ちゃった」
「マジで」
「大マジです。ごめんなさい。嘘ついてました」
「責任とるかぁ。てか、下した方がよくないか？」
「嫌」
「それ、計画してた？」
「へっへっへー」
「嵌められた……」
「いーじゃん。減るもんじゃないし」
　こうして、二人は夫婦になった。これが私の仕事だ。
　神エロスとしての私の仕事。しかし、時折思う。
　いい加減、私も嫁を迎えねばと。

淫乱エレーナ、ふたなり編。

妄想が膨らむ。
そういえば、一方的にされてばかりだ。
最近、気持ち良さそうに声をあげる女性達に、私は発情していた。
その願望が、作ってしまったと言っていいだろう。
時間制限はあるが、男根を生やすことの出来る魔道具を作った。
そして、生やしてから直ぐにしたことは……。
「こ、これをこうすればいいのか？」
オナニーというものを男性もする。それをしてみる。
右手で生えていきり起っている男根を上下に、手で掴んで動かす。
そして、左手でアソコに指を入れる。
同時に感じる。これは……ヤバい……。

その後、男性の快楽を知った私は、防音室にある人物を招いた。
「あ、あの」
名は、まだ言ってなかった。
「私は、エレーナと呼ばれている。その、そなたを誘ったのは……」
連れてきた女性は、何のことかと不思議がっている。
駄目だ！　もう我慢できない！
男根を生やした私には、もう制御が不能だった。
「わ、私と、そのセ〇クスをしてくれ！」
女性は、「え」と言うが、私は彼女の服を破り押し倒した。
「な！」
「すまない！　だが、もう耐えれない！」
目の前の女性は、凄く可愛い顔をしている。
破ったその服から見える下着も可愛らしい。
胸も豊富だ。どうしてだろう？　これが男性の欲求なんだろうか？
「ん！　んぅ！」
私は、ディープキスをした。もがく女性。
「エレーナさん！　ちょっと！　待って！　ん！」
私は、散々男達に弄られてきた。触られてきた。
それをすべて、この女性にしてしまう。
キスが終わった後、舌でコロコロと女性の乳首を舐め回す。
「あ！　ひぁ！」
気持ちいいようだ。次は、胸を揉みくだす。

　息を乱す女性の秘部を舐め回す。
　もう、盛りのついた犬のようになった私は、一旦動作を辞め、
　女性の口に大きくいきり起つ男根を突っ込む。
「んー！　んー！」
　女性は、抵抗する。私は、どうかしてしまったんだろうか？
　女性の口の中は、顔がとろけるほど気持ちがいい。
　女性の頭を前後に動かす。
「んぅ！　ひゃめれ！　んっ！　ん……」
　この男根には、仕掛けがもう一つある。
　この男根から出る、私の精液を少しでも味わったら、
　もう、する事しか考えれなくなるのだ。
「ん、んー……ん、ん、ん」
　ピチャピチャといやらしい音が響く。
　どうやら、味わってしまったようだ。
「さあ、したいだろう？」
　私は、息を荒げてそう言う。女性の瞳はとろんとしている。
「早く来て……エレーナさん」
「い、行くぞ」
　私の感情は、もう色欲塗れだ。
　女性の秘部に挿入する。
「あぁっ！」
「痛いのか？」
　女性は、恥ずかしそうに言う。
「は、初めてだから……」
　抜いた瞬間、少量の血が流れる。私も知っている血だ。
　私は、その愛らしい顔に歯止めが利かなくなった。
「あぁ！　あ！　あ、あ、あ、あ、あ！」
　激しく腰を動かす。女性も動かす。
「や、ヤバい！　予想以上にいい！」
「ら、らめぇぇっ！」
　もうイったらしい。それでも私は満足してない。
「もっと！　もっと！」
「ああっ！」
「はぁ！　はぁ！　な、名前を教えてくれ！」
「あ、う、ああ！　フェラリスです！　あん！」
「フェラリス！　なんて淫靡な！」

「言わないで！」
　腰を激しく動かす！
「フェラリス！　フェラリス！　フェラリス！」
「は、恥ずかしい！　ああ！」
「イク！　イクぞ！　フェラリス！」
「あ、来て！　中に来て！」
「あぁあああああっ！」
　絶頂を迎え、魔道具使用の男根は消える。
　フェラリスは、びくびくしながら絶頂を迎え、気を失ってしまった。
「もっと、もっとだ……」
　神は、子孫を残せばいいと言った。
　ならば、私の子孫ならいいはずだ。
　しかし、魔道具の調子は、まだ今一で子供が出来なかった。

「ああ！　あん！　あぁあああっ！」
　また、新しく女性を誘った。どうしよう……もう最高だ。
　こうして、どんどん犯していく。それは、とうとう神に知れる。
　神は、誰かに夢中らしく、この行為に目覚めた私を咎めなかった。
　念願の子孫が生まれる。

　これで終了かと、その時は思っていた。
　魔道具は、その淫乱性から私を虜にした。
「あ、あん！　あ、あ、あ、あ！」
　また一人犠牲になる。もう、欲望は止まらない。
　そして、女性として犯される日々も止まらない。
「神の馬鹿」
　そうつぶやくと、今日も私は新しい女性を探し、
　そして、また男達に犯される。
「何も変わらないじゃないか」
　　そうつぶやくと、私はひとしきりの性行為を終え、眠りについたのだった。

エレーナと獣人

　いつもの様に男漁りをしている私は、変わった奴に会った。人ではあるそうだが、どうやら獣人とのハーフらしい。これは誘いどきだと思って、私はそのフレイムという男を誘った。
「なんだここ？」
「気にするな」
　フレイムは、初めて来た場所で戸惑っている。そりゃあ、獣人のハーフで久々に人里に来たら、ラブホテルなるものがあるなんて知らないだろう。私は、フレイムを誘う。
「なあ、ここはお飾りか？」
「う！」
「なあ、なあ……」
　そう言いながら、私はフレイムの一物を撫で回す。
「そ、そういうことがしたいのか？」
　私は、「そうだ」と答えた。

「綺麗な体だ」
「お世辞だな」
「いやホントだ」
「可愛いなフレイム」
　私は全裸になって、同じく全裸のフレイムのペニスを握る。
「初めてか？　剥けていないな」
「そ、そりゃ人里に行くなんてないからな」
「いいだろう。こうしてやる」
　私はフレイムのペニスを豊満な両胸に挟み込む。そしてフレイムの陰茎の皮を剥く。
「ああ！」
　フレイムは、少し痛かったようだが、お構いなしに舐め回す。
「これをしながら、うん……ぶぼっ、ぶぼっ……うん……挟みながらしゃぶると男は喜ぶんだ」
「た、確かに！　ああ！　出ちまう！」
「イッてしまえ」
「ああ！」
　ビュルビュルと私の顔にフレイムの精子が射精される。私は、指で顔にかかった精子を口元に持って行き、ぺろりと舌を出して飲み込む。
「うん。濃いな」
「はぁはぁ」
「ふふふ。我慢できないか、さぁ」
　私は股を広げる。

「！！」
　フレイムは、もう濡れた私のあそこにその雄々しいペニスを出し入れする。
「あん！　あ！　あ！　あ！　け、獣だな」
「俺は獣人だ！」
「ひゃう！　そうだな！　あん！」
「あんた名は？」
「やん！　ああ！　エレーナだ」
「気に入った！」
　もっと激しく腰を振られ、私の腰はガクガクとしていた。
「エレーナ！　イクぞ！」
「あ、ばか！　あん！　中には出しちゃダメ！」
「もう止まらん！」
「いや！　あああっ！」
　ドクドクビュクビュクリ……トプ！　ツー……。
「ああ、はぁはぁはぁはぁ……ば、馬鹿！」
「もっとやるぞ！」
「！？　ちょっと！」
「さあ、もっとだ！　エレーナ！」
「いやー！　あんあんあんあん！　あん！　やめて！　もうダメ！」

　その後、一時間のセ〇クスが続いたが、私は、三ヶ月経っても子供は出来なかった。
「種族違いじゃ出来ないのか」
　少し残念そうに、私はずっと見ていた山里を後にした。

　フレイムはその後、メスの獣人を見つけたそうで、私はお払い箱。
　こんなやりマンは、もったいない男かな。そう思って諦めた。

END

©FLEMGAMES